

變動相と靜止相

——日英比較語法の一部——

速川 浩

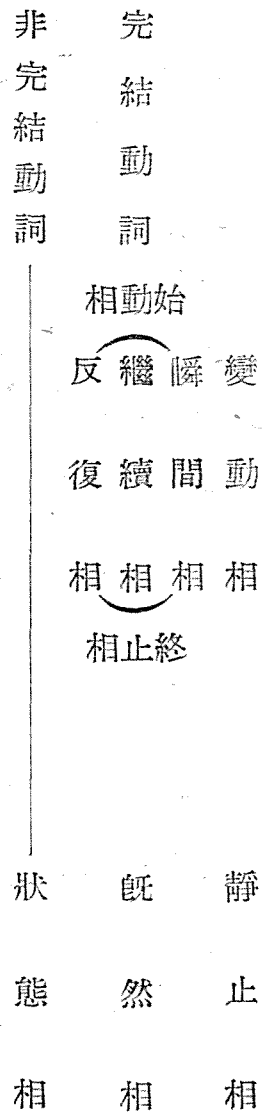
一 アスペクト 相の分類

近來英文法でもスラブ文法等の影響を受けて時制 (tense) と並んで相 (aspect) の問題が論ぜられる様になつた。時制は動詞概念を時の流れの横軸上に眺めて現在過去未來を論ずれば、相は別の角度から動作状態の變化を眺め始動繼續終止等の様相を問題とする。古い印歐語族に於ては時制なる文法形式はなく動詞の様態の差異を示す形式のみがありやがてそれが時制へと發展して行つたと言はれるが、國語に於ても現在過去未來をそれ／＼表すと言はれて居る助動詞の働き等を英文法流の時制の概念で説明しようとする可成りのずれを感じるので最近では國文法の方でも相の角度から之を考へようとする傾向がある様である。

さて相の分類には從來ポーツマ (Poutsma) (註1) カーム (Curme) (註2) 等の物が踏襲され細かい分類が爲されて居るが、自分以下論を進める便宜上先づ大別して變動相 (actional a.) 靜止相 (stational a.) の二つを考へる。前者は動作状態の生成變化運動する様相を表す物で、ポーツマの言ふ瞬間相 (動作が瞬時に完結する物、はねる、裂ける等) 繼續相 (動きに若干の時間的經過を要する物、住む、保つ等) 反復相 (瞬間的或は繼續的の物が反復繼續する物、喘ぐ、

變動相と靜止相

わめきたてる等)等の分類も要するにその變動の現れ方の種々相に過ぎぬ、之に反して後者の靜止相は動作の停退靜止の相であるが之を既然相と状態相の二に分ける。既然相とはエスペルセンの所謂 コンクルシブ・ベープ 完結動詞 (瞬間的動作又は究極目的を暗示する動作を表はす動詞) に於て動作が完結したその後に猶殘る状態である。例へば「布を裂く」は瞬間變動相であるが「布が裂けてゐる」は既然相である。然るに一方の状態相と名付ける物は同じくエスペルセンの謂ふ ノン・コンクルシブ・ベープ 非完結動詞 (殊に始め終りの考へられぬ既に一種の状態的な動詞で英語では心狀感情を表はす動詞 love, hate, see etc. に多い)に多く見る物である。一體非完結動詞は始めなく終りなき一種の状態的な動詞であるから之の變動相を考へる事は出來ない。かゝる状態は等しく靜止相に屬すと云つても前の既然相とは區別して考へる必要がある。從來この區別を明確にせぬ爲に多くの混亂が生じたと思ふ。(註4) 猶ポーツマ等の言ふ始動相・終止相等は變動相の兩端の位置を占むべき物である。今迄述べた事を簡單に表示すれば次の如くなるであらう。



二 變動・靜止の辨別法

所でこの二つの相對立する概念、一は生成變化する變動、一は停退靜止する状態を如何に辨別する法があるであらうか。例へば前者は動詞、後者は形容詞と確然と職能が別れて居るならば意義の紛糾は起らない。又事實多くの場合

にはその差が存在する。He died. 〔對〕 He was dead. 「心を清める」に對し「心が清い」の如きはそれである。然し又動詞形容詞のこの差が嚴格でない事は次の例によつても了解出来る。一、動詞にも be, have あり、ゐる等の靜止的な物がある事。二、同意語を一は動詞、他は形容詞で表し得る事、charming = beautiful, enraged = angry. 月が輝いてゐる 月が明るい 三、反意語の一が動詞、他は形容詞である場合のある事、富める — 貧しい、老いた — 若し 四、英語と國語で同じ概念を別の品詞で表はす事、老いた(動) — old (adj) 富める(動) — rich(adj)

又英語では靜狀相を現すのに屢々副詞を用ひる事がある。例へば He has just gone の變動相なるに對し He is away. は普通には靜狀相である。然し之とて The minister is up. には「大臣は立つて演説中」の靜止的の意義もあるが又一大臣は演説せんとして立上つた」の動的な意味も可能である。

かくして品詞別に動靜兩相を辨別する事は日英共に徹底せず、辨別し得る場合は僅かに一部分に過ぎぬ。そして殘餘の大部分は動詞が單獨に、或は修飾接辭の附加により、或は文脈により、或は他の文法形式に依り引受けなければならぬ。其處に種々の意義の紛糾を起すが又文法的の興味は其處にある。

三 殘態動詞と消態動詞

かくて以下日英兩國語に於て動詞が如何にして動靜の兩相を表はすかを説明せんとするのが本稿の目的であるが、性質上種々の相を持ち得ぬ非完結動詞は當然多くの考察の對象となり得ず、論議は主として完結動詞に關聯して展開されるであらう、だが此處に注意すべき事が一つある。如何にも一の動詞が動靜兩相を表はし得るのは完結動詞に限る。然しその逆に總ての完結動詞が兩相を表はし得るかと見るにさうは言へない。例へば開く (open) と言ふ動詞を考へて見ると閉ちて居た戸が開き始め (begins to open) 徐々に開き行き (is opening) やがて開き終る。 (has

opened) 始動、繼續、終止の各相を経て變動相としての開くは完結したがその後猶戸の開いた状態が残つて居る。
 (The door is opened) 之が既然相である。多くの完結動詞は之に屬する。例へば死ぬ、裂ける、集る、煮える、濡れる等は皆之である。然るに反之例へば照らす (shine) と云ふ動詞を考へて見ると之も照らし始め、照らし続け、照らし終る變動相の範圍は前者と同様に成立するが、さて照し終つたその後何等の形相が残らない。かゝる動詞には既然相が成立しないのである。叩く、奏でる、泣く、食ふ等は之に屬する。此の兩者の區別は以下動靜兩相を論ずるのに極めて大切であるが從來日英兩文法共之の差を論じた物を知らない。假に前者を殘態動詞、後者を消態動詞と名付けよう。

四 「て居る」の變動靜止

殘態、消態の差を認める事により從來の或る文法形式の説明を一層明確になし得ると信ずる一例を國語の「——て居る」形式に擧げる、從來口語に見る最も普通なこの形式が繼續と結果 (既然) の兩意を示す事は屢々論究されて來た。

豆が鍋の中でぐつぐつ煮えて居た (繼續) 食べて見ると豆は柔く煮えて居た (結果)

櫻が風にちら／＼散つて居る (繼續) 朝起きたら櫻が庭一面に散つて居た (結果)

勿論前者の變動を明示する爲に口語でも、「櫻が散つて來る」「日が昇つて行く」等に言分ける事は出来るが兎に角 (註5)
 一形式に相反する靜動の兩義ある事は紛はしくこの點關西方言の

彼は熱心に何か書きをる。(よる、書いとる) (繼續)、彼は熱心に何か書いとる。(書いちよる) (結果)。

の如く兩者を辨別する方が優れて居る様に言はれた位で如何なる動詞の時にかゝる別が來るかは餘り論ぜられなかつ

た。此の從來の説に對し佐久間鼎博士が「現代日本語の表現と語法」に於て英文法の素養を生かし相^{アスペクト}の觀念を導入して説明せんとしたのは一應の進歩であつた。即ち氏は動詞に次の二相を區別する要を説いた。

一、繼動動詞 一定時間の長さを要求する動詞、讀む、眠る、笑ふ、泣く等。

二、變動動詞 瞬間的な變動性の動詞、散る、死ぬ、立つ等。

大體前者は英文法の *durative* 後者は *momentaneous verb.* にあたる。變動動詞なる名は本稿に用ひて居る同じ名と混合する患があるので假に瞬動動詞と呼ぼう。然して氏は次の様に公式を立てた。

一、「繼動動詞十て居る」は繼續を表はす。

本を讀んで居る、笑つて居る。

二、「瞬動動詞十て居る」は結果現存を表はす。

旗が立つて居る、人が死んで居る。

之説は前述した様に從來の説明より一步前進して居り松下大三郎氏「標準日本文法」も大體この説明に準じて居る様であるが猶一脉の疑問が残る、佐久間氏の説を裏から言ふと次の様な事が成立せねばならぬ。

一、瞬動的動詞は繼續を表さない。

二、繼動的動詞は結果を表さない。

然るに(一)、瞬動的動詞も繼續を表す、「蚤がはねて居る」「太鼓を打つて居る」「大根を切つて居る」等は繼續と言つても正確には反復 (*iterative*) であり英語でも進行形が反復を表すと同様であるが尠くとも結果であると言ひ得ぬ事は明かである。更に氏の瞬動動詞の例とせる散るも前例の如く「花が風にちら／＼散つて居る」では立派に繼續となり得るのは如何であらうか。(二)、又繼動動詞も結果を表し得る、例へば流れるは「傷から血が流れて居た」では繼續

變動相と靜止相

であるが「地上に澤山血が流れて居た」では疑もなく既然である。

この様に考へると氏の如き動詞別による説明では徹底せぬ事がわかる。然し此所を前述の殘態消態の觀念を以てすると一層明確に説明し得る。即ち(一)、「消態動詞十て居る」は當然繼續のみを示し、その結果既然相は成立せぬ。

(二)、「殘態動詞十て居る」は繼續と既然との兩者を示す。蓋し繼續の「花が散つて居る」は「花が散る状態にある」Flowers are in the state of falling = Flowers are falling であり既然の「花が散つて居る」は「花が散り終り(て完了を認める)その儘の状態である」Flowers have fallen and remain so. = Flowers are fallen. に當る。この散り終つた後の状態を問題にし得るのは殘態動詞でなければならぬ事は明確である。さうしてこの場合殊に繼續である事を明示せんとすれば「花が散つて来る」「花が散つて行く」の如く言ひ得るのであつて、消態動詞の時はこの差をつける必要がないから「住んで来る」「食べて来る」の様にはこの意味では(起動の意味で見えて来る、笑つて来る等は別として)使はない。

私の言ふ殘態、消態と佐久間氏の言ふ瞬動繼續との區別を表にすれば次の如くなる。

		瞬 動	繼 動
殘 態	死ぬ、落ちる 裂ける	集る、眠る 癒る、昇る	
消 態	はねる 打つ	奏でる、笑ふ、住む 光る、照らす、食ふ	

此所で一寸國語と英語を比較して氣付く點である國語では純粹形容詞が非常に尠く現代口語ではこの「て居る」を

使つた形容動詞を以て代用する事が極めて多い。死んで居る (dead) 晴れて居る (fine) 病んで居る (sick) 怒つて居る (angry) やびつ居る (rusty) 等は國語ではそれに當る形容詞を持たない。之等は形容詞化しては居るが猶純粹の形容詞との間には一線を劃する事は悲しんで居ると悲しい、よるこんで居ると嬉しいとを比較すればわかる。前者は未だ動詞意識を喪失して居ず限定的に用ひる時は被修飾語は主語としての格が定つて居る點純粹形容詞と異なる。悲しんで居る人とは言ひ得ても悲しい話に準じて悲しんで居る話とは言ひ得ぬ。恰も an exclaiming man は a man who is exclaiming で被修飾語 a man の格が限定されて居る事、純粹形容詞の exclamatory sentence の如き自由に及ばないと同様で口語のこの種の形容動詞は英語の分詞に相應する物と言へよう。

今迄の引例では主として自動詞の場合のみを論じて來た、然し他動詞の場合は聊か自動詞と異なる定義を立てねばならぬ、即ち他動詞にあつては(一)「て居る」は殘態消態にかかわらず總て繼續の意のみを表し既然の意を持たない。(二) 既然相を示すには「である」を用ひる。

繼續

既然

自動、豆がぐつぐつ煮えて居る

豆は柔く煮えて居る

他動、豆をぐつぐつ煮て居る

豆は柔く煮てある

何故に自動詞に於てあつた既然の意が「煮て居る」では表されないものであらうか。自分は次の様に解釋する。自動詞では殘態動詞はその變動の面に焦點を置けば繼續となり、殘つた姿に注目すれば既然となり得る二面性があつた。然し他動詞は自動詞に比し遙かに生成躍動する活動的な力が強い爲に常に動的な面のみが意識に上るのであると。然し他動詞もやがて終止し殘態動詞ならばその結果を問題とする段階が來る。その時には他動詞は本來の躍動活潑な機能を停止して一種の自動詞的な靜狀に落着く、その一の現れは「豆を煮て居る」の目的格助詞を「一豆が煮てある」の主

變動相と靜止相

變動相と靜止相

格助詞がに推移する事實にも見られる。又繼續の折は「母が豆を煮て居る」の様に動作主が現れ得たのに既然の時に「母が（は）豆が煮てある」とは如何様にしても言ひ得ぬのも一證である。蓋し煮て居る中こそ動作主と動作が結び付けられて考へられたのであり、既に煮え終つた豆は煮た人とは遊離して獨立に存在するからである。^(註)それは丁度英語の受動態で The bottle was broken. と動作主がなければ状態で「瓶がこわれて居た」であり「The bottle was broken by the servant. と動作主を入れれば動的受動態で、「瓶が召使にこわされた」であるのと比較し得る。

(Poutsma XLV II. 6)

既然に「豆を煮て居た」は不可であるが受動態を用ひると「豆は煮られて居た」と居るが復活する、受動態は一種の自動詞に近づくからである。然らばこの兩者は全然同意義であらうか。外の例を挙げれば「燈が消されて居た」と「燈が消してあつた」と同意義であらうかと言ふに後者は行爲者（多くは文中に明示されて居ない）の恣意的（善意であれ悪意であれ）行動の時のみ限られて居る。従つて前者は動作の主體が無生物或は意志を持ち得ざる物でも良いが後者は人に限るのである。この事は從來論ぜられて居ないが「風が燈を消した」は「燈が（風で）消してあつた」には成り得ないが「月を見る爲（主人が）燈を消した」は「燈が消してあつた」と言ひ得るのでも明かである。國語の受動態は被害の感が強いから恣意的行動を受動態で言ふと屢々異様に感ずる。この意味で例へば「枕は頭が焼かれて居た」は變で「枕は頭が焼いてあつた」の様な言ひ方は便利である。

五 「——た」の變動靜止

次に現代口語で最も普通の助動詞たも又一にして完了（終止相）存在（既然相）繼續（繼續相）の三相を兼有する。

今日で三日も雨が降つた（繼續）

壁にかけた繪

(存在)

壁に繪をかけた

(完了)

完了と言つても國語のそれは英語の現在完了と異り時の制限に於て遙かに自由である。山田博士「標準日本文法」の例をとれば一、御覽なさい、きれいな月が出ました(現在の完了)二、私は子供の時國に居ました(過去を完了に表す)三、借りた物は返さねばならない(不拘時の完了)四、明日伺つたらばお目にかゝれませうか(未來の事件の完了)この第二の如きは英語では過去時制の範圍で國語でもこの用法に於けるたを過去なりと説明する説もある。(例 湯澤幸吉郎氏「口語法精説」)この點は獨乙語の現在完了 Ich habe sie letzten Sonntag erwartet. 或はフランス語の複合過去 J'ai eu une récompense l'an dernier. 等に相應する物と言へる。

此所にも又前述せる殘態・消態の別を認識する必要がある。即ち一般國文法で言ふ存在(即ち既然相)の意味を持ち得るのは殘態動詞に限ると言ふ事である。湯澤幸吉郎氏「口語法精説」中のたの存在態の説明はこの認識を缺いた爲に用例等に正當を失した。氏は言ふ『存在態とは動作のすんでその結果の状態のまゝに存する事を表す物で「……て居る」「……である」と言替えられる物である』と。此所迄は極めて當然で論議の餘地はないが扱、その實例として擧げられた物を見ると「これは一昨年架けた橋です」「昨日張つた障子」等のあるには疑なきを得ない。第一に之等の例は氏の説明の様に「一昨年架けてある橋」「昨日張つてある障子」の如く言替える事は出来ない。蓋し之等は完了のたであつて一昨年、昨日等の過去の一定時が指定してあるのはその動作の完了の時である事は明瞭である。たとへ現實に橋が未だに架つて居り、障子が張替えられた儘であつたとしてもそれは架ける、張る等の動詞がたまた残態動詞であつた爲であり、動詞に内在する意義的の要素が物を言つたので、之をたの持つ働きの如く説明するのは當らぬと言はねばならない。

文語のり、たり等も繼續、存在、完了の三態を示す事口語のたと同様であるが唯一つ注目すべき差がある。それはたに於ては限定的に修飾語として用ひられた時にのみ存在既然の意があるので、敘述的用法としては既然を表す爲には「繪が壁にかけてある」「繪が壁にかゝつて居る」の様にせねばならぬ點文語で「戸毎に國旗を掲げたり（掲げてあつた）」「月、中天にかゝれり（かゝつて居た）」と既然を示すのと異なる。然らば何故に口語で限定用法の時にのみ敘述用法にない既然の意味が成立するかについては從來言及した文法書を見ないが思ふに敘述的に「壁にかけた繪」と言ふ時は動詞は修飾に過ぎず焦點は名詞繪に移る。即ち全體を靜止の相で眺めたのである。此所に靜止相の一なる既然相の意義が生ずる素地がある。この外にも限定用法に靜止的の意義の強い實例は國語英語諸文中より擧げ得られるが詳説は又別の機會に俟つ。(註)

六 擴充形 (Expanded Tense) の變動靜止

英語で繼續の意を述べるには普通擴充形（一般に進行形と言はれる物）be 動詞十現在分詞の形式を用ひる。擴充形は繼續進行を表すと言つても使用の動詞の諸種の相の差により意義も極めて變動的な進行から持續的な状態へと幾つかの段階が存在する。最も變動可變的な動詞にあつてはその擴充形は一の状態から他の状態への推移の途中にある事を示す He is standing up. He is sitting down. 等は此の類で進行形 (progressive form) と言ふ名はこの時に最もふさわし。然るに imperfective な動詞にあつてはたとへば He is standing. He is sitting. の如きは變化移動のないコンスタントの状態の持續である。之を前者より分つ爲には繼續用法 (durative use) と名付けるも良からう。擴充形は國語の「て居る」等と異り既然相は表さないと云ふが He is sitting. は He is standing up. He has

stood up. した儘の状態が残つて居ると言ふ觀點からすれば一種の既然而靜止相に屬すると言へる。同様に He is grasping me. (私をつかまへて居る)は He is grasping at me (私につかみかゝつて居る)の既然靜止の相と言へる。之等の例では偶々一つの動詞が修飾語の附加により兩義に用ひられたからであるが一般には進行用法は擴充形で表しそれに對する繼續用法に當る物は(一)形容詞で He is dying. に對し He is dead. (二)副詞で He is going out. に對し He is away. (三)過去分詞で He is going. に對し He is gone. (四)受動態で He is opening the door. に對し The door is opened. 等の諸形式により表されるであらう。

更にこの形式が習慣的の物を表すポーツマの所謂 characterising function. He is always finding faults of others. (他人のあらさがしばかりして居る)等になると一層變動相から遠ざかつて來た事を感じる。そして遂に She is charming. 等の用例に至つては動詞意識を消失し一個の形容詞「たへば She is attractive. と同價値になるに及んで靜止相に完全に入込んだと言ひ得る。

今國語の「て居る」と英語の擴充形を比較して見る、前々章に「て居る」は繼續を表すと言つた時には本章に述べた如く進行と繼續とを分類せずに用ひたのである、そして「て居る」の代りに「て來る」「て行く」の用ひられるのは進行用法の場合である。又兩者共瞬間的動作の動詞にあつては反復相 (iterative) を示す He is throwing a ball. 「球を投げて居る」A frog is jumping. 「蛙が跳んで居る」等。又英語では非完結動詞(一章を見よ)は特に意志行動の要素を強調する場合を除くは擴充形を用ひぬ。故に feel, like, love, think, remember 等は一般に擴充形を取らぬ。然るに之等に對應する國語の動詞では自由に「て居る」と附す事が出来るのは兩者の意義内容に差が存する事を物語る I am seeing. とは言へぬが「私は見て居る」とは言ひ得るのは see は非完結動詞で見るとは完結動詞だからである。この意味で見るとは see より look に近く、同様に知るは know より recognize に近す。國語の「て居る」

を用ひないのはある、こゝろ、等の純粹存在詞のみである。

七 動的受動態と靜的受動態

先に國語で他動詞の既然相は自動詞のそれとは別なプリンシプルに依る事を述べたが英語でも又同様な考慮がなされる。自動詞では繼續完了既然の三相を一つの能動態で表現出来る。

The sun is rinsing (繼續)

The sun has risen (完了)

The sun is risen (既然)

然るに他動詞の場合は能動態で繼續完了までは They are raising prices. (繼續) They have raised prices (完了) の如く言ひ得ても次の既然相を能動態で言ひ表す別の術がない。國語では前述の様に、「火が消してあつた」と言ひ又は「火を消して置いた」「火を消した儘にした」等の方法で能動態のまま既然相が示せた。然し英語では受動態を用ひ Prices are raised の如くするのが普通である。否(完了)態の They have raised prices. すらも歴史的には They have prices in the state of being raised. や raised は目的 prices と一致し目的格の語尾を取つた受動態であつたのである。その意味では現在の所謂經驗受動態 (Passive of experience) He had his watch stolen. と同一であると言へる。いづれにせよ受動文は能動文を裏より言替えた丈の物でなく能動文にない状態を表す性質を持つて居る The servant broke the bottle. は動作であるが The bottle was broken. は多くの場合「瓶がこわれて居た」と言ふ状態である。状態の感じが強くなるのは受動態の形式「be動詞プラス過去分詞」の be にある存在の意の影響で前述の様に「瓶はこわされた状態にあつた」であるから當然である。

然しこの受動態にも變動靜止の二相がある。エスペルセンの言ふ *Passive of becoming. Passive of being.* (カームは同じ物を *actional p. statal p.* と呼ぶ) が之である、現代英語ではこの兩者が同形式で表される所に紛糾がある。
The door was opened at six, but I don't know when it was opened. (戸は六時には開かれて居た、(靜的)然し何時に開かれた(動的)かは知らなく) *Bills are already paid.* (勘定は既に拂はれて居た、靜的) *His bills are paid every month.* (勘定は毎月拂はれる、動的)この有用な兩者の差は古代英語では形式上の差があり現在ドイツ語等では立派に *sein* と *werden* で辨別して居る。又英語でも現在 *get. become* 等により動的受動態を區別する方法が發達して來て居るが之等については此所で詳述はしない。唯例により動詞の相と關聯してこの兩者を眺めて見よう。エスペルセンは僅かにそれに觸れて非完結動詞では靜的受動態のみ、完結動詞では場合により靜動の兩義ありと述べて居る。勿論前半は問題ない。然し凡ゆる完結動詞が靜動兩義を表せるであらうか、氏は靜的受動態とは *The result of an action in the past (M.E.G. 7.6)* 「過去の動作の結果」と言つて居る、結果を残し得る爲には矢張り殘態動詞でなければならぬであらう。to play (奏でる)は疑もなく完結動詞である。然し *The piano was played.* はピアノを弾き終つた結果としては何も残る物はない。(記憶、經驗の意は別として)即ちその眞の靜的受動態は存在し得ぬ。to beat も氏の文法に完結動詞の例に取つてある動詞であるが同様に *The dog was beaten by the master.* は動的受動態の意にのみ解すべきである。

國語ではこの兩者の區別は現代口語法では譯文中にも見られた様に「開かれる、動的」「開かれて居る、靜的」「拂はれる、動的」「拂はれて居る、靜的」の様にして達せられる、勿論第四章で述べた様に「火事に水が掛けられて居る」「鍋の中で豆が煮られて居る」等では繼續であつて動詞の相と文脈が決定する要素も多く居るは受動態でも二面性を失はない。

變動相と靜止相

變動相と靜止相

國語では物を主語とする受動態は英語の場合より遙かに限られて居り被害迷惑を表す場合或は擬人的用法以外には純粹の受動態として「家が大工に建てられて居る」「繪が畫家に描かれて居る」の様な表現は傳統的な口語では許されない。但し此の場合も成立つ経路でなく成立後の状態を示す場合には許容される。即ち、「この家は丈夫に建てられて居る」「數羽の鶴が描かれて居た」等は決して異様でない。換言すれば物を主語とする受動態は國語では靜的受動態に於てのみ許される事となる。以上は山田孝雄氏の「日本文法論」「口語法講義」に見られる要項で他の文法書も大體この範圍の説明を出で居ない。然し自分はこの説明は餘りに嚴格過ぎると思ふ。物を主語とする動的受動態も被害擬人或は翻譯臭等を問題とせぬ例が多く見當るからである。國語の大多數の他動詞はそれに應ずる自動詞を持つて居る。それ等の動詞では例へば「障子を破つた」の障子を主格に出しても「障子が破かれた」と受動態に言はずとも「障子が破けた」の如く言ひ得又實際にその例は多い。然し又それに應ずる自動詞型を持たぬ他動詞行ふ、食ふ、叩く等の場合は如何、「式を行ふ」の式を主語としたらば當然「式が行はれた」と言ふより外はない、「行はる」の例を徒然草に求めても「公事共繁く行はる」「節會行はれて」「(二七段)」「古の聖代すべて起請文につきて行はる、政はなき」(二〇五段)「中川にて使廳の評定行はれて」「(二〇六段)等では決して靜的受動態に限られて居ない、(或物は尊敬の意にも解されるが尊敬の意は元來受動より發した物である)現代語では勿論「今や盛大に開會式が行はれて居る」等は普通である、この様に見ると從來の文法家の言ふ如く嚴格な區別は設けられないが猶受動態は靜状態の意味に用ひられる事が多いと言ふのは事實である。それは期せずして英語と同一である。

八 現在完了 (Present Perfect) と動詞の相

現在完了時制に完了、繼續、經驗、結果等の諸用法が説かれて居るが此を使用動詞の相と結びつけて論ずる事は餘

りされて居ない。第一の現在に於ける動作の完了を意味する場合のみが眞に現在完了なる名に適する。動作が一先づ完了するからにはそれは完結動詞でなければならぬ事は明である。故に I have seen it. He has loved her. の様に非完結動詞を用ひてこの意味を持つ事は出来ない。次に現在の状態が過去の影響結果と見られる場合の用法 He has broken the window. I have lost my knife. He has gone to America 等では動作の完了は第一例と異り過去の一定時に行はれ唯その結果が現在に及んで居るのである。故に完了する爲には完結動詞たる事を要し、結果を残す爲には殘態動詞たる事を要する。故に消態動詞をこの意味に The moon has shone in the sky. She has laughed. の如くは使用出来ない。此所で注意すべきは等しく殘態動詞と言つても前記三例中でも broken the window は後に破れた窓が實相として残る。然るに lost my knife. gone to America の二例では後に残るのは空虚、寂寞の感じだけで具體には何も残らぬ。前者の如きを假に有形殘態動詞、後者の如きを無形殘態動詞と名付ける。

若し消態動詞の過去の動作が何等かの影響を現在に與えたとすればそれは思出記憶經驗としてあらう。かくて現在完了の第三用法經驗を表す働きは殘態消態共に成立する。He has travelled much. I have never seen a lion 次に現在完了が現在までの動作状態の繼續を示す所謂 inclusive present にあつては動作は過去にも現在にも完了して居ないので全然現在完了と言ふ名には適しなす。He has lived here long. I have disliked her ever since. 等に見られる如く此例では非完結動詞も又使用される。上述の四用法を完了の有無、完結非完結動詞・殘態消態動詞の面より整理して見ると次の如くなる。

用法	完了	使用動詞種別
1. 完了	現在直前に完了	完結動詞 殘態、消態動詞
2. 結果	過去に完了	完結動詞 殘態動詞

變動相と静止相

變動相と靜止相

- 3. 經 驗 過去に完了 完結動詞 殘、消態動詞
- 4. 繼 續 完了せず繼續 完結、非完結動詞 殘態、消態動詞

然るに實例には屢々第二の結果と第四の繼續とを混交した様な文が現れる。

They have deserted their home a long while.

She has departed these two days.

All the hours you have left are lonely.

(Poutsma: Gram of Late Mod. Eng. I. 122)

ポーツマは之は瞬間性動詞が臨時に永續的に用ひられた物と説明し、エスペルセンは状態の開始とその永續との混合である、即ち第一例の如きは *She departed two days ago.* *or She has been away for two days.* 兩者の混合であると言ふ。之等の動詞を見ると先に言つた無形殘態動詞が多い。故に私は殘態動詞の持つ動靜の二面性の中靜的な半面が表面に強く浮出して來た物と解釋したい。「彼女は二日も家を出たつきりだ」「長い間故郷を離れて居る」等が之にあたる。

以上で變動靜止の兩相の日英兩語法に現れる大要は言ひ得た。勿論未だ細目にわたつては述べ足りない所もある。例へば否定詞には状態を表す機能がある事(例、知つて居る事、知らない事、たんぼくが咲いていたり、すみれが咲いていたり、名まえは知らないがきれいな花が咲いていたり 國語讀本三學年) *mutative verb* (移動を示す動詞)の代用に *be* 動詞が用ひられる事 (*Here he comes = Here he is*) 前置詞に於ける動靜の用法 (*into/in*) 同様に國語の助詞にとへ等の差、獨乙語に見られる動詞が或は三格或は四格の補足語を取る事等はいづれも相の問題と關聯して研究すべき課題であると思ふ。

(附 記)

市河三喜博士を會長とする言語教育協會で新事業として英語と國語の比較を發音文法語彙の三部面に分けそれぐ
 専門家に委囑して研究して居る。自分はその文法部門を受持つた一人で本稿はその一部である。

註

1. ホーツの相の分類法 (A Grammar of Late Modern English)

(a) momentaneous arrive, burst

(b) durative

1. infinitively durative \longleftrightarrow live

2. ingressively durative \longleftarrow arise

3. terminatively durative \longleftrightarrow climb up

4. continually durative \longleftrightarrow maintain

(c) iterative

1. momentarily i. i part

2. duratively i. i chatter

2. カームの相の分類法 (Syntax.)

1. terminative(終止相) 2. ingressive(始發相) 3. effective(結果相) 4. durative(継続相) 5. iterative(反覆相)

3. Jespersen: Modern English Grammar IV. Conclusive verb, non-conclusive verb.

アスペクトを單に動詞に内在する意味的の物であるとしたらそれは辭書的研究に過ぎず文法の範疇に入らないであらう。その意
 味で實際エスペルセン等はアスペクトを論じて居ない。然し本稿では廣い意味に解して文法形式中に現れる相をも論じた。

4. たとへばホーツは前書べて終止相を final stage of the predication, denotes the end of activity. Ll.1 (敘述の最終段階、行
 動の終了を示す)と言ふ所を見れば、きざれもなく終止相であるが別の所へは terminative meaning, i. e. the result of the action.
 Ll.37 (終止、即ち行動の結果)と言ふのは既相である。

5. 「來る」は過去より現在への推移に重心が行き、「行く」は寧ろ將來に焦點が行く、(小林好日氏)勿論之は「川が流れて行く」「こ
 静止相と變動相

靜止相と變動相

とわりを言つて来る。」等の本動詞より派生した助動詞である、来るは或場合始動をも表す、「口元がほころびて来る」「知らず知らずに泣けて来る」

6. 他動詞既然相の場合目的格を保持して「豆を煮て置く」の様に言へる。この際は「母が豆を煮ておく」と動作主を明かに出来る、*The left the clothes unwashed.* (着物を洗はなうて置く) *I kept my watch damaged* (時計をこわれたまゝにして置く)等に當る物だが英語は受動態にせねばならぬ。

7. たとへば *a bill was paid.* は「勘定は拂はれた、動的受動」と「勘定は拂はれて居た、靜的受動」との兩意があるが *a paid bill* は「拂ひのすんだ勘定」の意味しかなう。See. Jespersen: *M. E. G. IX. 76: If the second participle of such verbs (i. e. conclusive v.) is used as an adjunct, we see plainly that it is a perfect participle: it denotes the result of an action in the past.* (若し之等の動詞 || 完結動詞 || の過去分詞が限定的に用ひられると完了分詞、即ち過去の動作の結果を示す事は明らかである) 之に反しポーツは過去分詞の限定用法にも *resultative* (結果) *durative* (繼續的) の兩者を認める、然し後者の例 *his own led horse. (horse which was being led)* の如きは稀である。(Gram. of L.M.E. LVII 7-8)

猶小林好日氏は「つ・ぬの本質」つ・ぬは共に完了態であるが「つは單なる完了、ぬは完了と共に動作の惹起す結果の觀念を伴ふ差ありとし、前者を完了態、後者を既然態と名付けて居る。之は丁度英語の *Spring has come.* (完) *Spring is come.* (既然) と相應する物である。然しつ・ぬについては諸異説ありまだ定説となつて居ない様であるから注意を引くに止めて置く。